はじめての子ども達との出会い

上坂元　絵里

。入園式の日

子ども達とともに毎日生活することが出来る。この事は、二十人の子ども達と実際に対面するまで私にとっては、夢のように思えました。入園の準備のために、名礼に名前を記しつつ、この子はどんな子かしらと思いをはせるばかりでした。四週間の思い出深い実習をさせていただいた、園内を見渡しても、子ども達がやって来てこそ本来の幼稚園の姿なのだと感じていました。

入園式の日、子ども達や母親の誰よりも、私が一番緊張していたことと思います。右往左往する担任の様子はいかにも心もとないものだったのではないでしょうか。

ボーッとした表情でフラフラと歩き回るA子ちゃん。何だか半分は宇宙人のようで、何を考えていたのでしょうか。手を引いて、いすに腰かけさせてあげようとしたら、ギュッと手を握りかえしてくれたB男君。緊張した私はとても励まされました。さっそく、初めての幼稚園の探索を試みようとしたのに、とどめられて泣き出したK君。そばでみていたY子ちゃんは、いつの間にか自分のポケットからティッシュを取り出してわたしてくれました。何て気の利いた思いやりがあるのかと感動してしまいました。自分もついさっきまで「ママ！ママ！」と泣きべそをかいていたのですが…。体は大きいのに、何とも頼りなげにメソメソしていたT君もいました。でも

泣きながら、しっかりと私の事を観察していたようです。

この二十人の子ども達と出会えて、新米保育者の私は、嬉しさに顔がくずれっぱなしでした。どうしてそんなにかわいいのでしょうと。このようにして幼稚園の日々が始まりました。今年の入園式は、お庭の古い桜の花が見事に色を添えてくれました。

○子ども達との生活

子ども達にとって幼稚園の生活が自分のものとなり、楽しいものになって欲しい。そして、私は、少しずつ子ども達の気持ちに近づいていきたい。そんな思いで私の保育が始まりました。しかし、一人一人の子どもには、これまで生きてきた三年間の生活があります。三年と言えば、僅かな年月のようですが、人間の命の最初の三年間の重みというものが、強く実感されるばかりでした。生まれた時から、子どもは、ある環境や価値観の中で育ってゆきます。子どもとともに生活しているうちに、子どもを通してこれほどくっきりと親の姿が見えてくるものかと、驚きもし、恐しさすら感じました。「子ども達を知る」ことは、最初の目標でもあり、しかも、いつまでも続く目標になりそうです。

A君は、私にとって理解しにくい子どもでした。一人で黙々と遊び、絵本を読んだりして彼なりに幼稚園での生活を楽しんでいるのかとも思えました。私への働きかけも多くなく、お友達との関わりも余りみられませんでした。けれども、毎朝元気に登園してくれるので、気にはなりつつも、他の働きかけの強い子どもの方へ関わることが多くなってしまっていました。ところが、一学期も終わりに近づいたある朝、A君はぐずって泣き出してしまい、なかなか母親と離れられませんでした。母親が帰ってからも、私のことを必死で目で追い、必ず近くにいるという様子でした。A君は、もっともっと私やお友達との関わりが欲しかったのです。この当然のような事に気付くのに長い時間がかかってしまいました。随分、こらえていたであろう、A君に対してとても申し訳ない

ことをしたという痛いような思いと、力をふりしぼって自分の気持ちを表現してくれたA君への感謝の気持ちとで、この日は私にとっても忘れられない一日です。

ある保育者としての大先輩の方が、子どもに何かいいことをしてあげようなどと考える前に、子どもの持っている良いものを失わせることがないように配慮するだけでも大変なことだ、と言われた事がとてもよく実感されます。

また、子どもと共に生活することが出来るという有難さを充分承知しつあるつもりでいながら、自分では気付かずに、自分の思いで子どもを動かそうとしていることも多かったようです。今、子ども達はどんなことを思い行動しているかを考えているつもりで、自分の考えを押しつけていたりするのです。帰る時間が近づいているから、早く片づけて静かになって欲しい、といった大人の思惑ばかりにとらわれて動いている時は、子どもの心が全く見えて来ないようです。「子どもの気持ちを大切に。」と言葉で言うのは容易ですが当然のように思えることほど難しいと思えます。子どもの為と思ってやっている事が意外に子どもには通じず、深い思いもなしに、子どもと関わった事が、子どもにとってはとても嬉しく、幼稚園がより楽しいものとなるきっかけになることもあるようです。

○子どもに助けられて

家庭という小さな最初の社会から、幼稚園という随分大きな社会に仲間入りした子ども達。その子ども達を迎える私としては、三歳のあなた達がどのくらい自分を表現する術を知り、どのくらい大人の手助けを必要としているのかといったことを、書物の上での僅かの知識以外何も知りませんでした。

二十人の子ども達が、幼稚園で生活している時には、幼いながらも一人一人が大きな存在にみえるようです。お帰りのあいさつの後、駄々をこねて母に抱きついている姿などを見るとずっと赤ちゃんに見えて、不思議な思いもしました。

でも、子ども達の適応する力には、感心させられます。お庭で遊んでいたら帰る部屋がわからなくなって泣き出していたり、年長さんに混じってしっかりクラス写真におさまっていたりした子ども達が、数日もたつと、自分の本拠地はしっかり心得て戻ってくるようになります。お友達や保育者のすることをとても良く見ているのです。保育者自身が、自分の動きに常に細心の注意を払わなくてはいけないということがとてもよくわかります。

また、子ども達の方から私に働きかけてくれることで、助けられているなと感じることがとても多くなって来ました。二十人の子ども達の動きを知り、安全を守ることは、保育者の第一目標ですが、「〇〇ちゃんが泣いてるよ。」「たいへん！たいへん！」と子ども達の方から知らせに来てくれたこともたくさんあります。しかし、それだからといって子ども任せにしてはいけないというところにいつも引き戻されます。子どもがその力を発揮してくれると、つい任せたくなってしまったりするのですが、いつも見守り、必要があれば援助することを忘れてはいけないと思います。

いつも迷って、子ども達に迷惑ばかりかけてしまっている私ですが、「ある母親が、子どもはいやなことは忘れてくれますから。」と言われたのに少し勇気づけられています。随分、たくさんあなた達の気持ちをくみ取れずに小さな心を傷つけてしまっているかもしれません。でも、残りの一生懸命やっている分で何とかいやな事は忘れて下さいとお願いしたい思いでいっぱいです。早く、あなた達に悪い影響を与えることのない保育者になりたいと思っています。

○これからの事

最初の一学期は、頭の中が子ども達のこと保育のことでいっぱいのまま過ぎてゆきました。今はきっと、霧の空に幾つかの星が霞んで見えているような状態でしょう。一つずつ輝く星を見つけてゆきたいものです。

この仕事について、本当に楽しく思われることの一つ

に、自分の生活と保育の仕事との密なつながりという事があります。毎日が自分自身を問われ続けることであり、つらくもありますが、日々の生活がすべて保育の中で生かされます。町を歩いていても、電車に乗っていても、母と子の関わりを垣間見て、様々な事を教えられます。講演を聞いていても今迄、学生として聴いたのとは全く異なり、実感として伝わってくるものがあります。話を聞きながら、本を読みながら、日々の幼稚園での生活や子ども達の顔が心に浮かんでくるのが、何とも心地良く感じられてなりません。

また、幼稚園では自然をとても大切にしています。そんな環境の中で、小学生の頃大好きだった雑草や花々とつき合う時間もぐっと増えました。いろいろな事に興味を持って経験してみたい。それが、直接・間接に日々の保育にも意味をもってくるのです。自分を豊かにすることで、豊かな心で子ども達を触れ合うことが出来るのです、そんな事を思うと、本当にやりがいのある仕事につけたことを感謝したい気持ちでいっぱいになります。

とはいっても、夏休みに入ってしまい、三ヶ月余りの子ども達との日々が、また夢のように思われてしまいます。ともすれば、のんびりと日々を過ごしてしまいがちにもなります。日々、伸びてゆく子ども達を追いかけて、自分も成長していくことはとても大変なことでしょう。けれどもいつまでも、子どもとともに、子どもを思って生きる保育者でいられるよう、息切れしないように歩んでゆきたいものです。そして、子ども達のあのぱっと輝く表情にたくさん出会いたいと思っています。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）